

日本佛教学会 発表レジュメ

発表題目 「法然から親鸞へー専修念仏思想の相承と問題点ー」

金信 昌樹 [高田短期大学]

仏教が6世紀古代社会に百濟から将来し受容され、以後奈良、平安、鎌倉、南北朝、室町、戦国、江戸の各時代を経て、近代に入り明治、大正、昭和そして平成の時代へと制約を受けながらも歴史的展開を経て伝えられ今日に至っている。

この約1500年に亘る日本の仏教の歴史の中で、一大転換期を迎えたのが鎌倉時代である。即ち、平安末期法然房源空が浄土教に帰入し専修念仏を唱導して、それまで仏教が国家の統制下にあつて貴顕を対象とした仏教であつたものを民衆にその門戸を開いたのであつた。法然が専修念仏を民衆に説き広めたのは、難行、苦行でもなくまたいくつかの行を並び修するような修行体系でもなくまた修するに資質能力が求められるものでもなく、阿弥陀仏の本願を信じ念仏を称えるだけで浄土に往生して大般涅槃の証を得るといふ一行専修の教えであつた。民衆にとっては解りやすく、何時でも何処でも称えられ誰でもが覺りを得られる易行の教えだけに老若、男女、善人悪人、貴賤を越えて受容されたのであつた。一つの行に徹するという専修性は、その弟子親鸞にも受け継がれるだけでなく、道元、日蓮にも見られる姿勢で、鎌倉時代の仏教に共通する特色といわれるものである。

この専修念仏の教えは、簡潔明瞭な教えであるが故に誤解も生じやすいものであつた。それは凡夫にとって称名念仏こそが覺りへの唯一絶対の行であるという優秀性の意識がそのようになさしめるものと考えられる。その意識は、称名念仏は阿弥陀仏に関わる五種の正行の内の一つであるが、阿弥陀仏以外の仏菩薩に関わる五種の行（「雑行」）との関係性やそれらを修する人に対する姿勢、それはまた阿弥陀一仏への帰依信順に対し他の諸仏、諸菩薩に対する姿勢や帰依信奉する人に対する態度にも現われてくる問題である。これはまた外教神に対しても同様である。阿弥陀一仏信仰の優位性を強調するあまり諸仏諸菩薩への軽侮、諸神軽侮の問題として『興福寺奏状』は指摘しているのである。それが法然の専修念仏停止の思想的理由となっているのである。この諸仏諸菩薩への軽侮、諸神軽侮の問題は、親鸞の晩年に關東の門弟達の間においても問題化していたのである。この問題は、常に専修念仏者の態度、信仰の姿勢に関わる問題なのである。

親鸞は、法然の専修念仏信仰を忠実に守ろうとする徹底した姿勢を持ち続けた弟子であつたが、雑行（諸行）を否定したり諸仏諸菩薩、諸神を軽んじ侮るような姿勢は見られず、門弟達にはその様な行に対し誠めているのである。

今発表は、親鸞の「専修」念仏の受容に徹しようとしたそのすがたの一端と専修念仏者の諸神、諸仏諸菩薩に対する姿勢態度を通して鎌倉仏教の特色である「専修」について述べてみたい。

キーワード

専修、専修念仏者の姿勢、諸神・諸仏・諸菩薩軽侮